

## 旅立ちの言葉

今年は何年にもなく、日本各地で積雪が見られ、ここ宮野にも度々雪が降りました。最近では徐々に暖かくなり、春の花が芽吹き始めたこのキャンパスで卒業式に臨む私たちは、新たな人生を手にながら、一步一步未来へと歩み始めています。

このようなよき日に、私たちの卒業式を身の引き締まる式典として挙げていただき誠にありがとうございます。重ねて、ご来賓の皆様方、江里学長をはじめ、大学関係者の皆様方、保護者の皆様方、ならびに在校生の皆様方、本日はご多忙の中ご臨席を賜り、厚くお礼申し上げます。

私たち三三四名は、本日、山口県立大学を卒業し、希望に満ちた将来に期待と熱い思いを持って踏み出します。

大学生活は瞬く間に過ぎ、情熱と不安でいっぱいだった入学式から早四年が過ぎようとしていることに驚くばかりですが、傍にはいつも人との絆があったように思います。かけがえない友人の存在や大学での勉学は私にとって有意義なもので、学問に取り組むことのできた大学生活はこの上なく贅沢な時間でした。

大学での四年間は今まで経験したことのないことばかりで私の脳裏には多くのことが焼きついています。その中でも特に卒業論文を執筆した四年次が最も印象に残っています。

私は二年次から日本文学研究室で、日本文学について学んできました。やがて四年次になると、私自身の将来の夢である高校教師を意識しながら、学ぶようになりました。私を含め、卒業生一同は三三四通りの形で四年間の成果を手に入れ、最終的には、それぞれが成果発表の場で、それを発表しました。知らないことばかりだった学問の世界を四年間研究し続けたという経験は私の大きな自信になり、春からは国語教育に携わる一人として誇りを持って、教壇に立つことができます。

「己の感情は己の感情である。己の思想も己の思想である。天下に一人のそれを理解してくれる人がなくなつて、己はそれに安んじなくてはならない。」

これは森鷗外が『余興』という作品で述べた言葉です。日常生活では多くの苦悩があり、自分自身を疑ってしまうこともあります。もちろん私自身、人生の中で自分の進むべき道がはつきりと見えていたわけではなく、人に相談し、また友人と切磋琢磨しながら、ここまで歩んできました。しかし、私にとっては高校教師を目指すという自分の中にある一本の線は揺らぐことがなく、だからこそ、それを支えてくれる人の大切さを実感することができたのです。卒業研究を指導してくださった先生方、自分とは異なる価値観で意見を出してくれる友人、会うと声をかけてくれる後輩たちがいたからこそ私は多くの困難を乗り越えられたのです。もちろん、苦しいことも辛いこともありましたが、その苦しさをバネにして仲間とともにそれ以上の楽しみを自分たちで作って行くことで、学ぶ喜びは何倍にもふくらみましました。ですから、この場を借りて、私を支えてくれた全ての方に感謝を述べ、胸を張って山口県立大学に入学して良かったと叫びたいのです。

思い出の数は一一人異なりませんが、キャンパスには数えられないほどの私たちの思い出がしみこんでいます。キャンパスの風景や研究室のたたずまいなど今、私たちの思い出はキャンパスを埋めつくすほど大きくなっています。

社会では学生生活よりも多くの試練が私たちを待ち受けています。しかし、四年間で私たちは、全力でがむしゃらに困難を乗り越える力を知らず知らずのうちに身につけているのです。その力で今後は新しい環境に思い切って飛び込み、お世話になった方々に、強く、大きくなった証を示すことができるように日々鍛錬し成長していきたいと思っております。

最後になりますが、いつも私たちを温かく見守り、ご指導してくださいました江里学長をはじめとする諸先生方、様々な場面で支えてくださった事務の方々や地域の方々、また家族の皆様方に改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

先生方のご健勝、ならびに後輩の皆様方のご活躍、そして山口県立大学のますますのご発展を祈念いたしました。旅立ちの言葉といたします。

平成二十四年三月二十一日

平成二十三年度学部卒業生総代

国際文化学部文化創造学科

中所佑子